伊丹市文化財ボランティアの会　　会誌　No.　３４

# 火曜会通信

2007(H19)・08・01 発行　　伊丹市千僧 1-1　伊丹市教育委員会事務局内

タイアップ事業　「伊丹の歴史と自然にふれよう」　第一弾講演会　7/10
奈良国立博物館教育室長　西山　厚氏　　講演概要　　中川　康

講演の主旨は、東大寺大仏(殿)の造立・復興を担った行基、重源、公慶の三人の生き方を通して、目的に向かって強い信念を持ち実践することを学び、また大仏(殿)の起伏にとんだ歴史を知ることである。

聖武天皇が大仏を造立した真意は何か。「万代の副業を治めて、動植ことごとく栄えむとす」と、人を含め全てのものが栄える世にしたい。「人有て、一枝の草、一把りの土を持ちて、像を助け造らむと情に願はば、恣に聴せ」と、奈良時代の格差のある社会において多くの人たちの力を結集しなければ大仏は造れないと考えた。

行基は、往還する役民・運脚夫を救済するために布施屋を設置し、浮浪人化した都市住民に布教していった。下級官人や豪族の中にも行基に帰依する者が出てきた。行基の行く所 1000 人も集まったといわれ、行基はこの知識結を率いて各地に寺院・布施屋を建設し、溜池・溝、橋を造り、治水等の社会事業を行った。聖武天皇は、行基のすぐれた活動を目の前にして、大仏造立の勧進を彼に依頼したと思われる。聖武天皇の大仏造営の大きな特徴は、天皇を中心とした知識によって事業を推進するというその造営方法にあった。行基は大仏開眼会を見ることなく、天平勝宝元年(749 年)に遷化した(82 歳)。

治承 4 年(1180 年)平重衡の焼き討ちにより、東大寺の伽藍の大半が焼失した。朝廷は重源に勧進による復興を命じた。重源が作成した勧進状には「尺布寸鉄といえども、一木半銭といえども」とある。たとえ布切れ・鉄くず・一木・半銭でも集めていく。わずかな寄付を限りなく集めることは、人々の思いを大仏に結集させることである。重源とその同胞は各地で勧進活動を開始した。唐和両朝で勧進を行ったのも特徴的である。文治元年(1185 年)大仏開眼会が行われた。重源の願文には、合力の人々を菩提の門・慈悲の室へ導いてほしいとあり、重源は「南無大毘盧那仏、南無大毘盧那仏、我が志を寄うこと莫かれ、我が志を寄うこと莫かれ」と繰り返した。それから 20 年後、大仏殿の再建をも成し遂げたのである。重源は再建中の東塔の完成を待たず、建永元年(1206 年)86 歳で世を去った。

永禄 10 年(1567 年)松永久秀の兵火にかかり、再び大仏殿は焼失し、大仏も失われた。大仏と大仏殿を江戸時代に復興したのが、公慶である。公慶は大仏修復に縁を結んでもらうため、勧進帳を作った。公慶は、「一針一草の喜捨」を願い、東北から九州まで勧進して廻った。大仏開眼会が行われたのは元禄 5 年のことである。この 7 年間公慶は夜眠る時にも横にならなかった、坐って眠ったのである。大仏殿再建はさらに困難な大事業だった。将軍徳川綱吉とその母桂昌院が公慶に帰依し、大仏殿再建を支援した。大仏殿の棟上式が行われた宝永 2 年(1705 年)、公慶は大仏殿の完成をみることなく 58 歳で亡くなった、過労死である。

大仏（殿）を仰ぎ見る時、この３人の僧侶の大仏造立と復興に対する熱い魂と歴史を知るべきである。

## << 坂　上　の　氏　姓 >>　　亀　井　　尚

伊丹に移り住んで坂上の姓が目に付くのに気づいた。近所の旧北村地区・現北伊丹では、耕地を持った本百姓、つまり代々その地の由緒正しいいわゆる旧家は坂上、池田、小西、瀾上、等の表札が多く見られる。

旧西国街道沿いの大鹿地区では、坂上田村麻呂がこの地で狩りをした際、村人が狩りのお手伝い、身の回りの世話等を献身的に行ったため、坂上の姓が与えられた、故にこの地区には坂上姓が多いのだ・・・との伝説がある。また大鹿の地名は坂上田村麻呂が大鹿を仕留めたのでこの名があると伝わっている。

坂上家の始祖　坂上家の祖先については日本書紀応神天皇２０年（ＡＤ２８５年）の秋九月に、東漢直（やまとのあやのあたい）の祖である阿知（智）使主（あちのおみ）とその子の都加使主（つがのおみ）が、自己の党類十七県を率いて来帰した、との記述がある。

また応神記には１４年（ＡＤ２８３年）弓月君が百済より来帰、自分の人夫（たみ）１２０県を率いて帰化しました。と奏した。これが漢使主（あやのおみ）姓は直（あたい）で太秦一帯を開き、氏寺広隆寺を創建した秦河勝、松尾大社を氏神とする秦酒公など秦氏は秦の始皇帝を始祖とする子孫と称している。秦、坂上両氏は、朝鮮半島から渡来、帰化したのだが、中国から移民した漢民族の王家の子孫と称している。これを裏づけるものに新撰姓氏録の記述がある。新選姓氏録には秦の始皇帝を祖とするとある。一方、坂上氏の始祖である阿知（智）使主もまた中国王族の子孫と称している。応神天皇は阿知（智）使主とその子の都加使主を呉に遣わして縫工女を求めさせた。呉の王は兄媛（えひめ）・弟媛（おとひめ）・呉織（くれはとり）・穴織（あなはとり＝綾織（あやはとり）の四人の婦女を与えた。４１年（ＡＤ３１０年）２月、呉より筑紫に帰ってきた。その時胸形大神が工女を望んだので兄媛を胸形大神に奉ったと日本書紀にある。呉織、綾織の両織姫は、猪名川を遡り池田に到着、機織りをはじめたとの伝承があり、池田市内には、伊居太、呉服、穴織、猪名津彦など呉織、綾織を祭神とする神社が六社もある。呉服は呉の服の意と言う。

坂上田村麻呂（７５８～８１１年）　続群書類従系図部の坂上氏系図には元祖漢祖皇帝―石秋王―康王―阿智王　誉田天皇（諡応神）御世、本国の乱を避けて母並びに妻子の母弟を引き連れて七姓漢人等帰化。天皇は大和国檜隈郡郷を下賜された。とある。都加使主の項には、姓氏録日。阿智使主子都加使主、大泊瀬稚武天皇（諡雄略）の御世使主と改め直の姓を賜った。男山木直は兄の方の子で従兄弟になる。山本直―志努直から９代目あたりに坂上の姓が見られる。苅田麿（左衛士督従三位坂上大忌寸=いみき）が坂上の始祖と系図にある。その子が征夷大将軍坂上田村麿（麻呂）で７９１年征東副使として蝦夷征討に参加７９７年征夷大将軍となり東北地方経営を発展させた。また京都の清水寺を建立。その後坂上氏は僧侶、名主など地域の名家として家名を高めたが政治の世界から遠ざかった。

## ◆仲間と旅　古代の薫り（吉備路）先人の歩み（備中高梁）　濱田　辰洋

青春18切符で、岡山の旅へ仲間10人で出発した。平日の通勤ラッシュで身動き出来ない状態で４時間立ったまま備中一宮駅に到着、気分も新たにレンタサイクルで吉備路巡り。レンゲや菜の花が咲く田園風景の中、小山がポツンポツンと散在している古墳群、果樹園になったり竹林であったり様々。

ちょっぴり息づかいを荒くしながらペダルをこいで、備中高松城址に着く。ここは天正10年５月、羽柴秀吉は備中高松城を奇策をもって攻略している。この戦いが織田・毛利の５年間にわたる長期戦の決戦場となったのである。

この戦いの帰趨いかんによっては戦国時代の地図が塗り替えられていたかもしれない、こ

れが「備中高松城の水攻め」である。この備中高松城を死守した戦国史上まれな人物、清水長左衛門宗治である。
「浮世をば今こそ渡れ武士の名を高松の苔に残して」と辞世を詠じ、46歳を一期として見事自刃した。秀吉は、宗治の首を前にして古今武士の明鑑と嘆賞し、礼を尽くして持宝院境内に一基の五輪塔を建立させ、手厚く葬らせた。
この広い公園を後にして、吉備路のシンボル備中国分寺の五重塔（729～749 天平年間 武天皇建立）へサイクリングまさに吉備路のハイライトともいえる眺めにしばし呆然…、周りには大勢の人たちが五重塔に見惚れていました。出合った古代の薫りを胸に今宵の宿へと走ります。振り返ると、夕陽に染まる五重塔に再び過ぎしロマンがかき立てられました。
次の日は、ＪＲで備中高梁駅に行く。到着後車でふいご峠まで行き、そこから徒歩約 20分、臥牛山の頂に松山城がある。整備された山道には「しばし休まれよ」など登城心得の案内板がある。この坂を城主も、そんな思いを胸に頂上に着いた。風景は高梁の町が一望。標高 430mにある天守は、現在する城として日本一高く国の重要文化財となっている。臥牛山を下り城下町へ。江戸時代に建てられた武家屋敷に立ち寄る。書院造りの旧折井家、寺院建築や数奇屋風の要素を取り入れた旧埴原家とそれぞれに趣があった。日本の道百選に選ばれている紺屋川沿いへ行くと、町家通りの雛祭が催されていた。玄関なのに各家庭の雛人形が飾られ、古い町並みに溶け込んでいる。市民による町おこしで道端には、花や七夕のように色の物が飾られて町が活気付いていた。
昼からは市内の資料館などを巡り、ＪＲ備中高梁駅に戻り、帰路に着いた。
次は夏の青春切符で武田信玄の縁の地を巡りたい。

## 春期バス研修旅行記　　＜土日Ｇ：細川勝海＞

去る５月８日、火曜会恒例の日帰りバス研修旅行が開催されました。皆さんの日頃の行いが良いせいか？昨年の春、秋に続き、参加３回目となる今回も、またまた好天に恵まれ楽しい思い出を作る事ができました。総勢４６名（会員外８名の参加有り）にて市役所前を８時半に出発、伊賀上野では松尾芭蕉の生家や、処女句集「貝おほひ」を執筆した釣月軒で現地ガイドさんのお話を聞きながら、芭蕉翁を偲びつつ一句作ってみました。“----------”
東の芭蕉、西の鬼貫と言われますが、芭蕉も元は関西人なんだ！！伊賀上野と言えば、伊賀流忍者の里では有りますが、忍者屋敷には寄らず、上野城の天守閣や３０ｍの高さが有る石垣上からお堀を眺めておりますと、そのまま水中に吸い込まれそうなざわめきが感じられました。忍者屋敷には、どんでん返しの畳や壁で、一瞬にして隠れ去る忍者の動きが思い起こされますが、これは敵と戦うためでなく、隠れて生き延びるための知恵であった様です。
昼食は、伊賀路のとろろ御前。ひとしきり飲んだ後、ご飯にとろろをぶっかけて掻き込む食感は又格別の味でした。午後は、東海道５３次の内、４７番目の関宿をゆっくりと見て回りました。古代には“伊勢鈴鹿の関”が置かれていた名残で関の名が残っています。江戸時代には、宿場町として、参勤交代や伊勢参りの人々でにぎわっています。関宿で感嘆したのは、何と言っても町並みの広さでしょうか！東西追分の間１．８キロに２００軒以上の古い町家が並び、まさに東海道と言った風情でした。伊丹の町家では見られない幕板、銅金具、飾り虫籠窓、方向が分かる店看板（漢字で書いてある方が江戸、ひらがなが京都方面を指しています。例えば、會津屋―あいずや）、ムクリ屋根もなだらかではなく、かなり急なカーブを描いていました。又、昔は間口の広さで税金が取られていた為、旅籠も間口が狭く、奥行きを広く取った作りで工夫されていました。行基菩薩が開創した地蔵院はお寺の様な立派な建物で、地蔵堂としては全国一だそうです。町並み景観変化のパノラマ写真も見事なものでした。帰りの車内は、演芸奉行の酒井さんにより、クイズやゲームや歌でみんなを盛り上げていただき、楽しいひとときを過ごさせてもらいました。

## 主な活動記録と今後の予定

＜＜過去３ヶ月の記録　＞＞

5/1　火　会誌　火曜会通信No.33 発刊
　　火　幹事　5月定例幹事会
5/8　火　定例　5月定例会バス旅伊賀上野関宿方面
5/10 木　タイアップ事業協議
5/17 木　G　ひしの実会三菱OB・E+αコース　70名
　　　G　伊丹緑丘小2年　97名
5/22(火)～27(日) 中公展示
5/23 水　どんぐり 有岡センター　堺住サロン
　　　G　AC20の会　40名
5/24 木　G　シルバー星六会　40名
5/25 金　G　伊丹市交通局　20名
5/27 日　町づくり タイアップ事業プレゼンテーション
5/30 水　G　春風公民館推進員講座 35名
5/31 木　G　㈱自然総研　50名
　　　G　伊丹市民生児童委連協 40名
6/1　金　G　大手前大　戸田先生　13名
6/5　火　幹事　6月定例幹事会
6/7　木　G　㈱朝日カルチャーセンター　30名
　　　G　刀根山若水会　25名
6/8　金　G　いきいき健友会　30名
6/9　土　G　森本記代氏　7名
6/10 日　G　三菱電機革新懇　10名
　　　G　ニコニコ会　16名
6/12 火　定例　6月定例会
6/16 木　どんぐり　北河原センター
6/19 火　タイアップ事業協議
6/23 土　ガイドブック編集会議
6/26 火　ロマン事業協議
　　　G　吹田市吹一地区公民館 18名
6/28 木　G　名取市市議会　13名
7/1（日）～8(日)阪急伊丹リータ展示
7/3　火　幹事　7月定例幹事会
7/7　土　ガイドブック編集会議
　　　伊丹市地域活動見本市展示
7/10 火　タイアップ事業第一弾講演会 180名
　　　定例　7月定例会（岡田家酒蔵・美術館）
7/12 木　G　大手前大１年生　19名
7/17 火　G　奈良県南部歴史クラブ 35名
7/20 金　G　福崎町老人大学史学部 50名
7/24 火　屋外研修 富田林寺内町（木曜班担当）

＜＜今後３ヶ月の予定

8/1　水　会誌　火曜会通信No.34 発刊
8/3　金　ガイドブック編集会議
8/7　火　幹事　8月定例幹事会
　　　定例　8月定例会　どんぐり座３作目発表
8/15～19 岡田家G盆休み
8/22 水　中公　わくわく教室
8/24 金　どんぐり　四つ葉センター
9/4　火　幹事　9月定例幹事会
9/11 火　定例　9月定例会
9/15 土　タイアップ事業第二弾南部散策・麦わら音頭等
9/25 火　屋外研修堺市方面（金曜班担当）
10/2 火　幹事　10月定例幹事会
10/10 水　定例　10月定例会　（石橋家）

**各分科会開催日時場所**

| | | | |
|---|---|---|---|
| 古文書 | 毎月第３火曜 | 午後 | スワンホール |
| PC 教室 | 毎月第2・4木曜 | 午後 | 中央公民 |
| どんぐり座 | 毎月第３火曜 | 午前 | スワンホール |

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

**編集後記**　先日のタイアップ事業の講演会では、まさかの最悪事態に遭遇し、みなさんには多大のご迷惑・ご心配をおかけしました。講演会開催前までの繰り返しのテスト・チェックでは全てをクリアしていました。ただ１点、講師の持参される USB フラッシュメモリーとパソコンとの相性の不安が残っていたのですが前日の電話問い合わせにも「多分大丈夫」に安心していたのが間違いでした。今ＩＴの世界は日進月歩１つの過渡期にあるとも思われますが、新しいものが古いものをある程度カバーもしてくれると言う過信が災いの元でした。今のように変換のテンポが速いなかで新しい物が入ってくると古い物が消されていく弊害のようなものをつくづく感じた次第。（なんのこっちゃという方には別途話すことにして）ともあれ多くの市職員には相性のいいパソコン探しに奔走して貰って時間内に修復軌道に乗せて貰えたのは不幸中の幸いでした。「感謝」の１語です。・・人知れず苦労した皆の為に・・MG
本号、事業もそこそこ、寄稿もそこそこでぎゅうぎゅうづめになりました。寄稿中カットした部分があります。あしからず　MG